

閃光のエクセスチオーネル

これは、人々の信仰が篤かった頃のお話。

とある街には、街の平和を守る天の使いが現れるという噂が流れていました。

天の使いとは一体何者なのか、街の人は知りませんでした。そんな中、一人の少年が天の使いに選ばれたのです。

ここはある街に有る修道院。

私がこの修道院に修道士見習いとして入ったのは二年前の事。あと一年、見習いとしての修行を積みめば、私も修道士になれる。そんな時の出来事だった。

ある良く晴れた日の昼間、私は規則正しく並んだ木々の間を、如雨露を持って歩いてた。

自分よりも背の高い植木。その間には香草や薬草が植えられた畑がある。苗一つ一つに水を差し、痛んでいる葉が無いかどうかを確認しながら、俯いて歩いてた。

時折枯れた葉を摘みながら畑を歩いていたら、ふと異変に気がついた。

この畑は、こんなに広がったのだろうか？

慌てて顔を上げ歩いてきた方を見ると、地の果てまでも続く畑と植木が目に入る。

一体何事だろう。背筋を走る痺れと口の中に広がる苦みを感じなが

ら、恐る恐る振り向く。

すると、畑の端と、見覚えの無い大きな木が目に入った。鏡の様に光を照り返している葉を付けた大木。この街から出た事のない私には見た事の無い物であったし、書物などでいろいろな事をご存じの修道士からも、聞いた事の無い物だった。

「突然お招きしてしまって、ごめんなさいね」

優美な声でそう声を掛けてきたのは、大木の下に佇む女性。この修道院の物では無いが、確かに彼女は、修道女の服を着ていた。

私は戸惑った。

この見慣れた風景の中に現れた異質をどう捉えれば良いのか、わからなかった。

如雨露を抱えたまま足を震わせる私に、彼女は言う。

「私は『鏡の樹の番人』と言います。

実は、あなたにお願い事があって、ここに来て貰ったの」

「私に、お願いですか？」

一体何なのだろうか。少し考えて、彼女は私に力仕事を頼みたいの

だろうかと思つたのだが、彼女が女性だとしても、私の様な子供よりは体力があるのでは無いかとも思つた。

彼女は静かな足取りで私に歩み寄り、そつと頭を撫でてくる。

「あなたには天の使いとして、この街に蔓延る悪い物を、少しでも退治して欲しいの」

「天の使い、ですか？」

天の使いの話は、私も聞いた事が有る。

いつの頃からかこの街には、悪人を懲らしめる正義の味方が現れるという、そんな話が囁かれてゐる。それが天の使いだ。

天の使いは、常に子供の姿で現れる。それは、天から使わされた天使様が、そう言う姿なのだろうと言われているのだが、まさかこの様な形で子供に任を任せていたとは、驚きだ。

……彼女の言う事が本当であるのなら。

「お願い、聞いて下さる？」

彼女は、私をここに招いたと言つた。つまり、彼女の力なくして、私は修道院に帰る事は出来ないのだろう。

嘘か誠かはわからないが、ここは彼女の頼みを受け取って置いた方が良さそうだ。

「わかりました。

私ごときでは力及ばない事もあるでしょうが、努力します」

彼女の目を見据えそう言うとき、彼女は腰に下げている袋から、暗赤色の石を十一個連ね、留め具の先端に真鍮色のメダイを付けたロザリオを取り出した。

「ありがとう。

それでは、これをいつも身につけていてね。

これに祈りの言葉を掛ければ、あなたは天の使いの力を使えるようになります」

そう言われて受け取ったロザリオは不思議な雰囲気を感じていて、もしかしたら、本当に天からの使命を受けたのでは無いかと、そう感じた。

「フェリーチョ……エスタス……デ、ディヴィーガ……？」

なんとか修道院へと帰ってこられた私は、休憩時間、人目の無い所で暗赤色のロザリオを片手に、彼女……鏡の樹の番人に渡されたメモを読み上げていた。

このメモに書かれているのが祈りの言葉らしいのだけれど、どこの国の言葉だかが全く解らない。

……これを暗記しないといけないのか……

一見暗号にしか見えない文字列を、つかえながら、偶に戻りながら何度か読み上げる。

何度かそれを繰り返し、なんとか一続きで読み上げる事が出来た。

「フリーチョ エスタス ディヴィーガ ポル チヴィート」

すると、手に握っていたロザリオから眩い光が溢れだし、私の身体を包む。

それは一瞬の出来事で何が有ったのだからよくわからなかったけれども、何だか妙に足下が明るいので後ろを見てみると、私の背中に、眩く光る翼が付いていた。

「へあっ！ こ、これは一体どういう……？」

驚いて思わず変な声を出すと、視界に文字が浮かんできた。

『能力発動中』

目までおかしくなったのかと自分の顔に触れると、知らぬ間に顔の上半分を覆う、翼を模った仮面を被っていた。

自分に起こった異変に混乱しながら、私は修道院の中を走り回り、いつもお世話になっている老齡の神父様の元へと駆け込む。

「神父様……神父様……！」

「やあ、どうしたんだい？」

「……本当に何が有ったんだい？」

見慣れない姿になった私を見て驚く神父様にすがりついて、言葉を詰まらせながら事情を説明すると、神父様がこう仰った。

「うん、そうか。」

君も選ばれてしまったんだね」

「君も、と言う事は、私以外にも天の使いになった方が居るのですか？」

不安が消えない私に、神父様はこう説明してくださった。

いつの頃からかこの修道院からは、数年に一人、天の使いとして街を守る事を託される者が出るのだという。

それは女性だったり、男性だったり、その時々によって違うけれども、皆誇りを持って正義の味方らしく人々を守っていたとの事。

「だから、安心なさい。」

君も神に仕える者として、正義を全うすれば良いのだよ」

「神父様……でも、不安です」

情けない声で言う私の頭を撫でながら、神父様は優しく語りかけてくる。

「不安になってしまうのは、君の責任感の裏返しだよ。」

大丈夫、神様はみていてくださる。

それに、後ろを見てご覧」

言われるままに、私は後ろを振り返る。

すると、何人もの修道士の方々が集まってきていた。

「これ、もう後戻り出来ないよね？」

「ですよね」

私が天の使いになった事を、知られてしまった。

尾ひれ背びれを付けておもしろおかしく語るような方々では無いだろうけれども、この話は下手したら修道院中に広がってしまうなど、思わずうなだれた。

それからというもの、私は日々街に蔓延る悪人を退治していた。

普段修道院の中に居るのにどうして悪人の居場所がわかるのかという、あのロザリオに付いているメダイが、悪人の居場所を指し示してくれるのだ。

最初はいくら天の使いの力が使えると言っても丸腰で立ち向かうのは不安だったのだが、力を使っている時は光の矢を放つクロスボウが使えると、仮面が教えてくれた。

そのクロスボウで放った矢は、貫いた相手の悪心を消し去ってしまうと言う。

罪を憎んで人を憎まず。悪い事をする人の中にも、自ら望んで悪に手を染めているわけでも無い者も居るだろう。懺悔と償いの機会は与えられるべきだ。

今日も、メダイが悪人の居場所を指し示す。

私は近くに居る修道士に声を掛け、祈りの言葉を唱えて、修道院から飛び出した。

眩く光る翼で街の上を飛び、メダイの指し示す場所へと急ぐ。

辿り着いたのは、昼間なのにもかかわらず、何故だか薄暗い雰囲気漂う、貧しげな家が建ち並ぶスラムだった。

袋小路で三人の子供を追い詰める、複数の大人達。

一体何が起きているのかを見極める為に、私は近くの家の屋根に降り立ち、身を潜めて様子を見る。

あの子供達は兄弟だろうか。私と近い年くらいの少年と、それより背の低い少年、それにまだ幼子と言っても良いような年の子が、怯えた様子で大人達と対峙して居る。

「おじさん達は一体何なんですか？

僕達家に帰りたいんです！」

一番年上とおぼしき少年がそう言うとき、大人の内の一人がこう言う。

「何言ってるんだ。坊や達はこれから、おじさん達と良い所に行くんだよ。

おら、大人しく付いてこい」

人攫いか。そう確信した私はクロスボウを取り出し、乱暴に少年の腕を掴む男に、光の矢の標準を合わせる。

未だにクロスボウの扱いに慣れていないので、慎重に狙いを定めないと、あの兄弟達にも当たってしまう。当たった所で怪我にはなりはしないが、どんな影響が出るかはわからない。故に慎重になった。

てのひらに汗をかきながらクロスボウを握っていると、一番年下の子が他の男に無理矢理腕を引かれる。

「やー！ にーたん、にーたんたすけて！」

急がないと。しかし焦ると手が震えてしまう。

そうしている内に一番年上の少年が、自分を掴んでいる男の腕に噛み付き、幼子を取り返す。

少年が頬を殴られ、抱えている幼子と一緒に地面に倒れる。

「このクソガキがっ！」

「おいおい、落ち着けよ。」

折角の上玉なのに顔殴ったら、売値が下がるだろ？」

男達と兄弟達の間が、少し空いた。その隙を見て、私はクロスボウの

引き金を引いた。

光の矢に貫かれ、その場にうずくまる男と、地面から立ち上がり弟二人を背に庇う少年の間に降り立つ。

「狼藉はここまでにしていただきましょうか」

ここまで距離が近ければ、そうそう的を外したりはしない。

「なっ、なんだお前！」

「化け物だ、逃げろ！」

慌てふためき逃げ出そうとする男達に、私は何本も光の矢を打ち込む。

男達に当たらずに家の壁に刺さった矢もあるが、それも僅かな時間で消え去る。

そして、兄弟達を取り囲んでいた男達は皆地面に伏した。

男達を揺すり起こし、皆に自首しに行くように言い聞かせ、男達がおぼつかない足取りでその場を去った後。私は改めて兄弟達と向かい合う。

「危ない所でしたね。怪我は、大丈夫ですか？」

弟達を庇い続けていた少年の、赤く腫れた頬に触れると、少年の服を握りしめた弟達が後ろからおどおどとこう言い出した。

「兄ちゃん、この人、天使様かな？」

「にーたん、このひとこわくないひと？」

すると少年は、弟二人を両手で抱き寄せ、私にこう言った。

「天使様、ありがとうございます。」

おかげさまで僕も、弟達も助かりました。

なんてお礼を言えば良いのか……」

私は天使では無いのだけれど。その勘違いが少しだけ微笑ましく思えて、思わず強張っていた表情が緩んだ。

「お礼なんて、別にいいですよ。あなた達がこれから善くあってくれれば、それで十分です」

少年にそう言うのと、彼も口元を綻ばせて。

この兄弟達を助けられた事に高揚しているのか、胸が高まるのを感じながら、私はその場を飛び去って行った。

それから数日後、私が入っている修道院が属する教会で、聖体拝領が行われた。

大きな十字架と聖像が据えられた祭壇を前に何本も並ぶ長椅子。高い天井に、色とりどりの色硝子が詰められた窓。そこから差し込む虹色の光が鮮やかなこの聖堂。

そんな教会にやって来た信徒の方々に、種なしのパンと、杯と、ワインを配る。

この教会にやって来ている信徒の方々は皆貴族だ。華やかな衣装に身を包み、握っているロザリオも、誂えものなのだろうか、作りの良い物ばかりだ。

その中でひとり、少し歪な作りをしたロザリオを持っている少年が居た。

彼はいつも母親と一緒にこの教会へ礼拝に来ている。

どうしてもワインが苦手だという彼に渡す杯は、幼児用の小さなもの。

杯にワインを注ぐ前に彼と、彼の母親にパンを渡す。

すると彼は、母親に小声でこんな事を言う。

「母上、母上の聖餅と僕の、交換してくれませんか？」

「何言ってるの。私の方がちょっと大きいからって欲張らないの」

小さく聞こえてきた彼の子供っぽいお願いに、私は思わずすりとししてしまう。

「交換なんかしなくても、聖餅の生地は全部同じ重さになるように分けて焼いていますよ。」

お母さんが持っているのはたまたまよく膨らんだだけです」

すると彼は、顔を赤くして、すいません。と一言言って俯いてしまふ。

別に怒っているわけでは無いのだけれど。

縮こまってしまった彼に、話題を変えようとこう話しかける。

「ところで、そのロザリオはどうしたのですか？」

いつも使っているものとは違うようですが」

その問いに、彼は膝に載せたロザリオをじっと見つめて、それから、

私の方を向いてこう答えた。

「実は、彫金の練習の一環として、針金を曲げてロザリオを作る練習もした方が良いつて、先生に言われたんです。

それで作ってみたのですけれど……やっぱり、歪ですよね？」

困ったようにはにかむ彼に、私は笑顔で答える。

「そうですね。正直な事を言うと、少し歪ですね。

けれど、それもあなたが努力を重ねている中の一つなのですから、大事になさってくださいね」

彼と、彼の母親と、笑みを交わし合ってから、杯にワインを注ぐ。

少量とは言え、ワインを飲み干した後にはいつも顔を真っ赤にしている彼に、無理に全部飲まなくても良いですよ。と言うと、彼は、神様から賜ったものだから全部飲みきる。と言う。

少し食いしん坊ではあるけれど、信心深い彼の事を見て、何故だか突然、あの日助けた兄弟達の、特に兄の事が思い返された。